

# 魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

## 1 銀の狐

「そら行けー、ほれ行けー！」

ほんとうは狐に聞こえないように小さな声でしたけれど、ニーダマは愛馬パカラの耳に口を近づけて言いながら、かかどで腹をけりました。あの、美しい銀の狐が、今まさにニーダマの目の前に姿を現したのです。これは興奮しないわけにはいきません。

ニーダマは一瞬たりとも目を離さないようにしながら、腰にゆわいた弓矢を後ろ手にまさぐりました。すると突然、パカラの足が真つ白い氷の上で滑り、キラキラと光る氷の霧を巻き上げました。そうです、夢中でパカラを走らせているうちに、いつの間にやらニーダマは凍った湖に入ってしまったのです。

ニーダマは、ふと背後を振り返ります。白く煙る視界の向こうには、色とりどりの春の花が咲き乱れていました。

銀の狐が足を止め、こちらに顔を向けました。そして、首をちよつと振ってコーンとひと声鳴くと、氷の上を悠々と歩き出しました。

「おのれ、狐め！ おれ様を馬鹿にするなよ」

ニーダマはパカラの腹を、力いっぱい上げます。びつくりしたパカラは、ヒヒーンといなないて走り出しました。

銀の狐を目指して、弓をぎゅつと握り締めたニーダマはパカラを急がせま

ぎよつとした表情を銀の狐が浮かべたその時でした。パカラは氷のひびに蹄をひっかけてしまい、すってんころりんとひっくり返りました。宙に投げ出され固い氷の上に落ちたニーダマは、おのれ！ と声を上げて痛むお尻を押さえながら立ち上がると、足が滑るのも平気で駆け出します。もちろん、右手にはしっかりと銀の弓を握りしめ、その瞳は銀の狐の姿を決して見失うものかと、らんらんと燃えていました。

そして――

走りながら矢をつがえ、銀の狐に狙いを定めたニーダマは、パカラと同じように氷の裂け目に足を取られてしまいました。でも、ニーダマは転んだだけではすみません。転んだ拍子に足をくじいてしまったばかりか、握り締めていた弓の先で、その眼を強く打ってしまったのです。ニーダマは苦痛に顔を歪めて氷の上を転げ回りました。でも、不幸はそれだけでは終わらなかったのです。転んでも手放さなかった銀の弓に寄りかかりながら、なんとか立ち上がったニーダマの足下で、薄い氷がめりめりと破れました。痛みにぎゅつと眼を閉じたままのニーダマの体は、みるみるうちに冷たい湖へと吸い込まれていくのでした。

## 2 ローズン

ニーダマの姿を、黒い針葉樹の陰から冷たい眼差しでじっと見守る姿がありました。北の魔女、ローズンです。ローズンは、ゆっくりと木陰から姿を現し、すすーつと凍った湖面を滑ります。銀の狐が足を揃えてきちんと座り、ローズンの姿をじっと見上げます。

今まさにニーダマの顔が湖の中に消えんとした瞬間、ローズンの杖がついつとニーダマの目の前に差し出されました。ニーダマは凍てつく氷のふちから手を放すと、なんとか手を伸ばして杖を握りしめました。沈みかけていた顔が少

しだけ浮き上がり、ほんの一瞬、杖を手にした女の顔を認めました。それが誰だかなんて、今のニーダマにはどうでもいいこと。ただ弓を捨てた右手にありつた力の力を込め、必死の思いで杖にしがみつきました。

ニーダマはすっかり凍えてこわばった口で何かを言おうとしましたが、歯ががくがくと震えてしまい、言葉を絞り出すことはできません。ローズンは顔色一つ変えず、杖を差し出した手も動かさず、ただじつとニーダマを見つめていました。

銀の狐がささきつとローズンのそばに駆け寄ると、不満げに杖の先を鼻で突きます。

「フォルウ……？」

だって、自分を殺そうとした手ですもの。きつと銀の狐——フォルウという名前なのです——は、ローズンの行ないが不満だったにちがいありません。

ローズンはフォルウに優しく微笑みかけて、首を左右に小さく振りました。ローズンはしつかりと杖を握っていましたが、ニーダマにはもう杖を握り続けるだけの力が残っていません。すっかり凍えきつて気を失いかけているニーダマの体は、ずるずると沈んでゆくほかありませんでした。その目はうつろで、何も見えてはいません。もう、ニーダマは頭まですっかり沈んでしまい、穴の空いた湖面にはゆらゆらと髪の毛がたゆたっていました。それを見届けたフォルウは満足げに、小さな鳴き声を上げました。

その声に、ローズンはふと我に返ったように湖面へ目をやると、杖を持つ手に力を込めました。すると、白い手のひらから青白い光がふわりと立ち昇り、杖を伝うと、わずかに杖の先にかかったニーダマの指から手のひらへと広がり、腕を、そして凍てついた水に沈む体を包み込みました。

ローズンの眉に力がこもります。滑らかに磨き上げられた美しい杖を静かに持ち上げると、青い光に包まれて、ニーダマの体が徐々に氷の上へと姿を現しました。ローズンはほつとしたような顔を刹那に浮かべると、ぱつと振り向いて歩き始めました。

ローズンの後には、真っ青な顔をして息も絶え絶えなニーダマがゆらゆらと浮かび、まるで見えない糸で引かれるように空中を漂って行きました。その後ろを、銀の狐フォルウが氷の欠片をけ飛ばしながら、つまらなさそうに付いて行きます。

〈つづく〉